

序

和光学園校長 丸木 政臣

『ぼくは負けない』の原稿を一読して、正直なところびっくりした。そしてすがすがしい感動を味わった。一九六〇年ころからの反動的な文教政策は、教育を破壊し、学校から人間らしい営為をぬきさった。そのことはこれまで教師の手で、あるいは研究者やジャーナリストの手で、かなり詳細に書かれてきた。だから故意にそのことから目をそむけようとしなにかぎり、父母・国民の間では周知のこととなっている。

ところがこの原稿は、おとなが書いたのではなく、その“ひどい学校”の被害者の位置にある中学生が書いたのである。急速におとなに近づく青年期。彼らは針のごとく鋭敏であり、またガラスのごとくもろい。おとなが慣習的に無造作にふるまうことの中で、彼らは傷つけられたり、怒ったり、反抗したり、つますいたりする。そのことを被害者の位置から鋭く、詳細をもって書いていることに驚嘆したのである。能力主義の選別と差別の教育が進行するなかで、教師はいつのまにか子どもの痛みを知ろうとせず、「一〇番内にはいっとた者手を上げてみい！」というようなことをする。やりきれない気持の中学生は日記の中に「宮沢賢治のような先生に」と書

2 き、教師の神経を逆なです。教師というのは権威によりかかるので、この中学生を「できもしなくせに」と白い眼でみる。中学生のほうは気持ちのうえて居置り「横山遊び」という名のカンケリをはじめ。教師は身内意識がつよいので、同僚が批判されたとなると理不尽にも、束になつてはみだした連中を抑えにかかるところした今日の教師の姿勢を、さまざまなエピソードによって生き生きと描き出している。

物事のとらえ方、文章のはこびは専門家はだして舌をまく。あるときは奈落におちこむほど悲痛であるはずなのに、彼の軽妙、洒落な筆づかいはある種のすがすがしさとはほえまじさず感じさせる。学校の「君が代」押しつけにたいして、彼は懷疑し、それが国歌としての必然性をもつものでないことを追求する過程はまさに圧巻である。「君が代」の君を天皇ととらないで、国民とおきかえればそれでいいじゃないか、という教師の強弁にはおそれいるが、中学生は教師の偽善を見ぬいているし、勝敗の帰趨を見こして生徒総会の討論にもちこんだりする。彼の予測どおり生徒総会は教師の圧力で幕がおりる。その教師が同和教育の時間に「一切の差別を排する」というとき、彼はいまの教師にそれを語る資格があるのかと傲然とうそぶく。

懷疑し、純粋な思いをもてばもつほど生きづらい。そんな人間は「弱者不遵存」で切りおとされる。しかし彼は「どここい生きている」とばかりにたくましく生きつづける。私は彼の生きる確信と、ふてぶてしさに心を深くゆさぶられた。